めりーくりすます・ふぉう・だい

メネ@分家

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
めりーくりすます・ふぉう・だい

【Ｎコード】
Ｎ０２２３Ｐ

【作者名】
メネ@分家

【あらすじ】
ある雑誌会社に勤める「私」は、社長の頼みで外国へ向かう事になる。その国にいたのは、とても優しい人たちで……。

（前書き）

結構長いよ！　短編だけど！
相変わらず支離滅裂のようですけどお楽しみください。楽しみやがれー。

あ、いつも通り微妙にグロっぽいです。が、まあ血は出てないんでいつもよりはやわらかいかもです。

私がその地を訪れたのは、もしかすると必然だったのかもしれない……と、私は考える。

「あれ」は……いや、「あの御方」はきっと、私の事を初めから知っていたのだ。全て、何もかも。そして私を律するために、あのような……いや、今語るのはやめておこう。それすらも、「あの御方」には分かっているのだろうから……。

「はぁ、＊＊での神様やその信仰について？」

社長から直々の呼び出しがあったかと思えば、なんて事はない、いつもの国外取材の依頼だった。てっきり国家を揺るがすような大スクープでもあったのかと思っていたから、なんだか肩透かしを食らった気分になる。

私が少しだけ渋い顔をしたのを見て、社長は軽く笑った。

「なんだ、もしかして役不足とでも思ってるのか？　いいか、今＊＊では異常気象で飢餓が進んでいてな。その中で生きるには、きっと『神様』のような信仰対象があると思うんだ。それを調べるっていうのは……実に、楽しい事だと思わないかい？」

「はぁ……」

楽しそうに喋りだす社長に、適当な相槌を打つ。

……社長の話術は巧みだ。私が入社したての頃、本当に雑用しか仕事が無く気持ちが沈んでいたところを、社長が話しかけてきた事があった。その時、私は真面目にその話を聴き入り、深く深く考えて、雑用にすら意味があると悟ったように気分になっていた。……

もっとも……全く同じ話を毎年新入社員に語っていると先輩から聞いたときは、ひどく呆れたものだ。それからも私は社長の話に幾度となく感動し、その度に先輩から指摘され――最近では、社長の話は殆ど聞いていない。

「まあ、いいじゃないか。いろんな国をまわるっていうのは、普通の人には中々できないんだからね」

「はぁ……」

そうですね、と話を打ち切ってから、自分のデスクに戻る。

まずは取材先の位置を知らない事には話にならないと思い、地図帳を開いた。国名をぶつぶつとつぶやきながら、地図の中から探していく。数分の後、ようやく発見して……驚愕した。

「なんだこれ、……砂漠じゃないか」

もはや異常気象どころではない。国の周辺全てが、砂漠となっている。こんな場所に国家があるのか、と怪しいくらいだ。まあ地図に記載されているのだから、存在しているのだろうが。

それにしても、社長の人でなし。こんな場所に取材に行けとは、もはや死刑宣告に等しいではないか。無事に生きて帰ってこれたら、一発ぶん殴っておこう。それでクビになったとしても、別の会社を探せばいいさ。

ぐちぐち文句を言いながら、荷物を揃えていく。カメラ、メモ帳、地図と、カレンダー……ん？　今日は何日だったっけか。十二月の、ええと……。

「そうか、クリスマスイブだ」

パッと思いついたように口走り、その声が案外大きく――周りの目線がこちらに向けられたのを見て、慌てて口を閉じた。……そう、今日は十二月二十四日、クリスマスの前日だ。町行く子供達がやけに嬉しそうだったのは、そういう事か。

今日準備して、明日出発……いや、今日出発でもいいかな。……向こうでもクリスマスって概念があるんだろうか、と少しだけ興味が湧いてきた。ああ、社長、やっぱ取材は楽しそうです。

なんて事を考えながら、準備を進めていく。

『12月24日　19：52発　＊＊行き』

青みがかったチケットを手に、搭乗口へと急いだ。キャリーバックを引きずりながら腕時計に目をやると、もう十分前だ。急がなければ。

「お客様、お急ぎくださいませ――」

ああ分かってる、と心の中でイライラと叫び、走る速度を上げた。……畜生、いくら今日発の便があったからって、こんな早い時間だったらやめとくんだった。おかげで乗り遅れそうだ。

身体全体で走るようにして、やっと機内に辿り着く。乗客は殆どいなく、一人が二つの座席を使っても構わない程だ。なるほど、チケットが見つかる訳である。

私は同じ国を目指す仲間が少ない事に、ちょっとだけ寂しい気もしたが……同時に、これから何時間も続くフライトの事を考えると、足を伸ばせるというのは嬉しいと思った。

暑い。熱い。アツイ。

国に入って真っ先に感じたのは、その感覚だけだった。とにかく暑い。今はまだ昼前だ。なんだってこんなにも暑いんだ？　今でこんなにも暑いという事は、……昼過ぎを想像してみると、思わず身震いした。

社長が手配してくれていた通訳の人もこの暑さはキツイようで、さっきからパタパタと手を団扇替わりにあおいでいる。ああそうか、団扇とか持ってきていればよかった――と、今更ながら後悔した。

「トコロデ、取材ッテ何デス？」

現地の女性が通訳を介して話しかけてきた。初めは受け入れられるのかと心配していたが、なかなかにフレンドリーそうだった。

「ああ、ええと……。この辺に、『神様』みたいなものってありま

すかね？」
「カミサマ？」
……しまった。そうか、神様なんて言い方をしていないのかもしれない。
「何て言えばいいのか……そうだ、崇めているような、……そのう……。尊敬している人、……かな？」
ああ、訳が分からなくなってしまった。尊敬してる人なんて、神様というよりは親とか先生だろう……。
混乱して頭を抱えている私をよそに、現地の人たちが何人かで話し合っている。……もしかして、心当たりがあるのかもしれない。
「あ、あの……」
「……モシカシテ、『ごーです』様ノ事カナ？」
私の声を遮って、女性が言った。『ごーです』、なじみのない言葉だ。通訳の人に意味を尋ねたが、分からないようだ。たぶん造語かなにかだろう、との事である。
『ごーです』か。妙な名前だ。社長はこの事を知っていたのかな、と思いながらメモ帳に記しておいた。ついでに現地の人に頼んで、綴りも付け加えておいた。まるで虫が並んだ文字だが、きっとこれが楷書なのであろう。
「すみませんが、もう少しお話を――」
ぐぅううぅ　ぐぎゅるぅう
腹に居座る虫が警報機を鳴らした。しかも、盛大に、勢いよく、大音量で。そういや……昨日から……何も……食べてなかった。腹に空虚感があった訳だ。
現地の人達が顔を見合わせ……はじけるようにして笑った。
「飯ナラアルカラ、沢山食ベルトイイヨ！」
「……はい……」
顔を真っ赤に染めながら、消え入るような声で返事した。
意外と多いなおい、と思わず呟く。

異常気象だの飢饉が多いだの言われてたから、食糧の心配をずっとしてたが……それは必要なかった。むしろいつも食べてる昼食より多く、通訳と二人でも食べきれるかなぁと思うくらいだった。もしかして、買い出しに行ってたりとかするんだろうか。ああ、オアシスでもあるのか？　どう見ても、これは豊穣のレベルだろう。

試しに、一番手前にあった緑の野菜を口に含む。何か調味料で味付けられているのか、甘いような辛いような汁が染み出てきた。野菜はあまり好きな方ではないが、これはおいしい。日本に戻ったら作ってみようかな、と独身が独りごちる。

十分に野菜を味わったところで、今度は汁物へと目を移した。見た目からするとコーンポタージュだが、味はどちらかというと味噌汁に近かった。聞くと、大豆を使ってるよ、との事だ。成程と思いながら汁をすする。

そういえば、この人たちは食べないのだろうか。自分たちだけ食事をとるっていうのもなんだか気まずい。

「あの……食べないんですか？」

箸を一旦止めて尋ねると、隣から表しがたい言語が聞こえてきた。通訳である。その言葉ははっきりと伝わったようで、彼女らの反応は驚くほどに顕著だった。かなり慌てて、手をぶんぶんと振って、大きな声で言葉を連ねていく。残念ながら私自身は翻訳スペックなど持ち合わせていないので、通訳さんに目をやった。

「私タチハ後デ食ベルカラ、気ニシナイデ！」

どうやらそう言っているらしい。……気にしないでと言われても……無理な話だ。上目づかいに家の中をざっと見回すと、色黒の人たちが十数人。外の方にも何人かいるようで、ゴニョゴニョと話し声らしきものが聞こえる。

こんな状況で気にせず食ってられるか、と心中では思っているが、彼女らが言うのだからしかたない。極力普通に振る舞うようにして、食べ進めていった。

陽もだいぶ傾いていて、そろそろ夜になるだろう。夜、という単語にどこかひっかかって少しの間思案すると、ああ今日はクリスマスだなあと思いだした。今頃日本では、リアルが充実しまくっているカップルどもで一杯なんだろうな。それに僻んでネットサーフィンするのは半分くらいか。

「夕方は涼しいと思ってたんだけど……」

昼間太陽によって熱せられた砂は、いまだに熱を持ち続けている。まだ陽光が無い分昼間よりはマシだが、それでも日本の夏よりは暑かった。この熱も夜になると全く消え去って、むしろ寒くなるっていうんだから信じられない。社長のど阿呆、帰ったらほんとにぶん殴ってやるからな、日本の方に向かって悪態をついた。

寒くなる前に家に入っておこうと思い、腰をあげ

「君は外の人かい？」

「……はい？」

当然投げかけられた質問に驚き、つい尻餅を付く。まったく、尋ねるにしてもタイミングってものがあるだろうよ、と言いかけ……ハッと気付いた。

今、日本語で話しかけられた。

慌てて顔を上げると、立っていたのは色白で黒髪、なぜかファー付きの黒マントを羽織っている、……誰か。誰なんだ、あんた。

「肯定文を疑問形で発音するとは、君は変わった日本人だね。もしかして帰国子女かな？　……ああいや、この質問はいらない。もう一度尋ねよう、君は外の人かい？　今度はちゃんとした答えが返ってくるように頼むよ」

「は、……いやあんた誰だよ、あんたこそ外の人間なのか？」

捲くし立てられた長文があまりにぶしつけだったために、こちらも喧嘩腰になってしまう。生粋の日本人を帰国子女呼ばわりとは、中々いい度胸じゃないか。それに私がそんな年に見えるのか。

「わたしか？　わたしは、と聞かれればそれは『いいえ』となるね。外から来たのは合っているけれど。で、君はどうなんだい？」

「いや……、ああ、……はぁ……」
「この場合どちらを取ればいいのかな。まあここは多数決で可としようか。よくよく考えれば、日本人がここの人間な訳がないものな」
初めから気付けよ、と言ってやると無視された。もしかすると聞こえなかったのかもしれないが、言い直す勇気はない。
「……もうすぐ、夜だね。……それじゃあ、『外の人』。また会うだろうけど」
なんだか最後の言葉が気になってしょうがないのだが、私が困惑してるうちにマントの奴はさっさと歩いて行った。数秒経ってようやく目の焦点が正常に合うようになると、マントはもう見えなくなっていた。夕日は、まだ沈んでいない。

黒いマント。ファー付き。ベルト。黒髪。ロング。背が高い。色白。
家の中でゴロンと横になってから、さっきの奴を思い出していた。考え続けていくと、いろいろな発見もある。……マントにベルトか。なぜかサンタクロースを想像したが、全然違った。第一サンタは赤色だ。
「##、##########」
何かの声にふと目を開けると、色黒のドアップに思わず息を呑んでしまった。改めて顔を見るとどこか心配したような雰囲気で、さっきの言葉もたぶん安否を訊いてくれていたのだろう。身体を起こして笑顔で手を振ると、どこかホッとした表情で笑った。
そうだ、この人ならさっきのを知っているかも――そう思って口を開こうとすると、外の方から歓声が湧きあがった。目の前の人も驚いた様子で、パタパタと外へ駆けていく。私もそれに倣ってついて行った。

外はもう夜だった。昼間とは全くの対照的な寒さに、体が震える。歓声は途切れる事なく続く。サッカーのワールドカップ並の大声

が鼓膜を揺らし、頭をぼーっとさせた。ああ、そのせいだ。きっとそのせいだ。頭がおかしいから、見間違えたんだ。

だからなんで……さっきの、マントがいるんだ？

「こんばんは、みんな。良い子にしていたかい？」

「うん、してたしてた！　早く寝たよ！」

「ちゃんと働いた！」

「えっとえっと、……がんばった！」

「そうか、良い子だね、みんな」

子供たちがマントに駆け寄り、口々にそう話す。……あれ、……なんで私、言葉が分かるんだ。

ついには大人までもが傍に言って、自らの良い子っぷりを語り始めた。マントはそれらの全てに耳を傾け、微笑んでいた。

やがて全員が話し終わると、マントが右手を掲げる。

「さあ、みんな。わたしからのぼくからのおれからのプレゼントだ。安らかな死を、あげよう」

狂人のような言葉を放つと、一斉にみんなが跪き、「ありがとうございます」と叫んだ。……なんだ、これは。死が、嬉しい……のか？

もはや恐怖しか感じる事のできない笑顔を浮かべて、彼が彼女が、ゆっくりと右手にこぶしを作った。そして、人形の糸は切れる。プツンと、あっけなく。跪く事さえできなくなったみんなは、ゆっくりと砂に向かって倒れた。

血はない。苦しみもない。未練もない。そんな嬉しそうな顔を見ると、かえって怖くなった。

「な、……何してんだよあんたッ！」

いつの間にか声が出て、そしてしまったと思う。殺させるかもしれないと、今更危険を感じた。

「君は、……ああそうか、『外の人』か。……おっと、質問に答えなければならないね。今、彼らに安らかな死をあげたところだよ。聞いてなかったのかな？」

「聞いてたさッ、それはいい！　なんで殺した！？」
刹那、
彼の彼女の表情が変わる。
ああ地雷を踏んだのだなと、他人事のように考えた。
「はっははははははは、そうかそうか。人間ってのは、やっぱり……良いのと悪いのがいるんだね？　ああ、話してあげようか。そして自分の罪に押しつぶされるがいいよ。それがお似合いだろうから」
笑っていない顔で笑われるという怖さが、ようやく理解できた。
漫画なんかで見た時は、なんとも思わなかったけど。
「君は、昼にご飯を食べたね。どれくらいだった？　多かったろうね。『彼らの食糧全て』を貰ったのだから。それと、彼らが食べているのを見たかい？　見てないだろうね。『食べてない』のだから。彼らはね、君ともう一人の為に、今日一日飢えきっていたんだよ。君に、精一杯の歓迎をする為にね」
「え、あ、」
「ああ、やっぱり気付いてなかったのか。これだから人間は！　いいか、君のような人間のせいで、良識のある良い人間が埋もれるんだよ！　君如きに、彼らの生き様を蔑ろにする権利があるというのかッ！？」
いきなり激高する彼に彼女に、私はただ恐怖する事しかできなかった。
「……すまない」
低い声で、彼は彼女は謝った。
もしかしてさっき言ったのを謝ってくれているのだろうかと思ったが、
「君は『悪い子』だから、わたしはぼくはおれは殺せないんだ。……すまない」
全く違う事だと分かって、
「だから、君には死に等しい痛みをあげよう」

これからの地獄を知った。

右手を掴まれて一捻り、骨が外れる低い音が中からも外からも鳴った。そのまま内側に向かって思い切り折られて、手首が腕輪のように腫れ上がった。

左手の人差し指の爪をゆっくりと剥がれる。いっそ一思いにやってくれと言いたかったが、右手の痛みで口が上手く動かなかった。爪を剥ぐ途中に、骨を折られる。指が妙な方向に曲がっていた。やっと爪が剥げたと思った時には、人差し指は親指よりも太くなっていた。

ふいにベキと音が聞こえたかと思うと、左足が腹に向かって曲がっている。そのまま指を一本一本丁寧に関節を外していく。かろうじて口から漏れた声も、彼に彼女には届かない。

痛覚がマヒしたのかそれとも私がおかしくなったのか、もう何を感じて何をされているのかわからなくなっていた。気付いた時にはもう両足が奇形になっていて、自分の足じゃないように見えたのが怖かった。

彼が彼女が私の喉に手を伸ばし、ゆっくりと回転させていくと、口の中から低く鈍い音が伝わってきた。もしかして死ぬんじゃないだろうかと、他人事のように考えた。

数十年前に頼まれていた記事を書く為に、私はパソコンの前に座り、昔を思い出していた。

なあ、社長。この記事、やっぱ書くのやめてもいいかな。

そう言うと社長は、折角体験したんだ、それを伝えるってのは大事だよ……と笑った。

そうですね、と私も笑う。

変な形をした社長の左手の人差し指を見て、それから私はパソコ

ンに向き直った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0223p/

めりーくりすます・ふぉう・だい

2010年11月20日11時25分発行